芥川

（第六段）

要旨

昔、身分違いの女を幾年も求婚し続けてやっと盗み出した男がいた。逃げる途中雷雨に遭い、女を蔵の中に隠すが、中にいた鬼に女を食われてしまった。男は悲しんで、「いっそ露のように私も消えてしまったらよかった。」と歌を詠んだ。これは後の二条后が入内以前に、その美貌から男に盗み出されたところ、兄たちによって連れ戻され、それを鬼の仕業だと言ったのだった。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～P五八・6〈男に問ひける。〉	ある男が、手に入れることができそうにない高貴な女を、やっとのことで盗み出し、芥川の辺りへ連れて行ったところ、女は露を見て、「あれは何か。」と尋ねた。
第二	P五八・7〈行く先多く、〉～P五九・7〈消えなましものを〉	夜が更け雷雨になったので、男は一夜明かすため女を蔵の中に入れ、自分は戸口で警護をしていた。その間、中にいた鬼が女を一口に食べてしまったが、男は雷の音で女の叫び声に気づかなかった。夜が明けて事態が分かった男は、たいそう嘆き悲しんだが、どうすることもできない思いを歌に詠んだ。
第三	P五九・8〈これは、〉～終わり	これは後に二条后となる女が、従姉妹にあたる女御のそばに仕えるようにしていたところ、その美しさから、男が盗み出して連れ出したのだが、后の兄たちが聞きつけて取り返した。それを鬼の仕業だと言ったのだった。后がまだ若く、入内前のこととか。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①昔、男 | あり | けり。 ②女の | え | 得 | まじかり | ける | を、
ラ変・用 | 過・終 | 格助・同格 | 副 | ア下二・終 | 打推・用 | 過・体 | 格助・対象

年 | を | 経 | て | よばひわたり | ける | を、 | からうじて | 盗み出で
格助・経時 | 八下二・用 | 接助・単接 | ラ四・用 | 過・体 | 接助・単接 | 副 | ダ下二・用

て、 | いと | 暗き | に | 来 | けり。 ③芥川 | と | いふ | 川 | を
接助・単接 | 副 | 形ク・体 | 格助・時間 | カ変・用 | 過・終 | 格助・引用 | 八四・体 | 格助・経場

率 | て | 行き | けれ | ば、 | 草 | の | 上 | に | 置き | たり | ける
ワ上一・用 | 接助・単接 | カ四・用 | 過・已 | 接助・順偶 | 格助・体修 | 格助・場所 | カ四・用 | 存・用 | 過・体

露 | を、 | 「かれ | は | 何 | ぞ。」 | と | なむ、 | 男 | に | 問ひ
格助・対象 | 代 | 係助・提示 | 代 | 係助・強意 | 格助・引用 | 係助・強意（係） | 格助・対象 | 八四・用

けり。
過・体（結）

④行く先 | 多く、 | 夜 | も | 更け | に | けれ | ば、 | 鬼 | ある | 所
形ク・用 | 係助・同類 | カ下二・用 | 完・用 | 過・已 | 接助・順理 | ラ変・体

と | も | 知ら | で、 | 神 | さへ | いと | いみじう | 鳴り、 | 雨 | も
格助・引用 | 係助・同類 | ラ四・未 | 接助・打接 | 副助・添加 | 副 | 形シク・用（ウ音） | ラ四・用 | 係助・列挙

いたう | 降り | けれ | ば、 | あばらなる | 蔵 | に、 | 女 | を | ば
副（ウ音） | ラ四・用 | 過・已 | 接助・順理 | 形動ナリ・体 | 格助・場所

奥 | に | 押し入れ | て、 | 男、 | 弓、 | 胡籙 | を | 負ひ | て | 戸口
格助・帰着 | ラ下二・用 | 接助・単接 | 男 | 弓 | 胡籙 | 格助・対象 | 八四・用 | 接助・単接

に | を | り、 | はや | 夜 | も | 明け | なむ | と | 思ひ | つつ | ゐ
格助・場所 | ラ変・用 | 副 | 係助・強意 | カ下二・未 | 終助・他願 | 格助・引用 | 八四・用 | 接助・継続 | ワ上一・用

①昔、ある男がいた。②女で手に入れられそうもなかった人を、幾年にもわたって求婚し続けたが、やっとのことで盗み出して、とても暗い夜に（逃げて）来た。③芥川という川（のほとり）を連れて行ったところ、草の上に置いていた露を（見て）、（女は）「あれは何か。」と、男に尋ねた。

④目的地までまだ遠く、夜も更けてしまったので、鬼がいる所とも知らないで、（そのうえ）雷までもとてもひどく鳴り、雨も激しく降ったので、荒れ果ててがらんとした蔵に、女を奥のほうに押し入れて、男は、弓や、胡籙を背負って戸口にいて、早く夜が明けてほしいと思いながら腰を下ろしていたところ、鬼が、早くも一口で（女を）食べてしまった。⑤「あれえっ。」と（女は）悲鳴を上げたが、雷が鳴る

たり　ける　に、　鬼、　はや　一口　に　食ひ　て　けり。　⑤「あな
存・用　過・体　接助・単接　副　格助・手段　八四・用　完・用　過・終　感

や。」　と　言ひ　けれ　ど、　神　鳴る　騒ぎ　に、　え　聞か　ざり
間助・詠嘆　格助・引用　八四・用　過・已　接助・逆確　ラ四・体　格助・理由　副　カ四・未　打・用

けり。　⑥やうやう　夜　も　明けゆく　に、　見れ　ば、　率　て　泣け
過・終　副　係助・強意　カ四・体　接助・順理　マ上一・已　接助・順偶　ワ上一・用

て　来　し　女　も　なし。　⑦足ずり　を　し　て　泣け
接助・単接　カ変・未　過・体　係助・強意　形ク・終　格助・対象　サ変・用　接助・単接　カ四・已

ども、　かひなし。
接助・逆確　形ク・終

⑧白玉　か　何ぞ　と　人　の　問ひ　し　とき　露
係助・疑問　代　係助・疑問　格助・引用　格助・主格　八四・用　過・体

と　答へ　て　消え　な　まし　ものを
格助・引用　八下二・用　接助・単接　ヤ下二・用　強・未　不可願・体　終助・詠嘆

⑨これ　は、　二条后　の、　いとこ　の　女御　の　御もと
代　係助・提示　格助・主格　格助・体修　格助・体修

に、　つかうまつる　やう　にて　み　給へ　り
格助・場所　ラ四・体(謙)語り手→いとこの女御　格助・状態　ワ上一・用　八四・已(尊)語り手→二条后　完・用

ける　を、　かたち　の　いと　めでたく　おはし　けれ　ば、
過・体　接助・逆接　格助・主格　副　形ク・用　サ変・用(尊)語り手→二条后　過・已　接助・順理

盗み　て　負ひ　て　出で　たり　ける　を、　御兄人　堀河の大臣、
マ四・用　接助・単接　八四・用　接助・単接　ダ下二・用　完・用　過・体　格助・単接

太郎国経の大納言、　まだ　下臈　にて　内裏　へ　参り
副　格助・状態　格助・方向　ラ四・用(謙)語り手→内裏

やかましさのために、（男は）聞くことができなかった。⑥次第に夜も明けていったので、（男は蔵の奥を）見ると、連れて来た女がいない。⑦（男は）地に足をこすって（じだんだを踏んで）泣いたけれども、どうしようもない。

⑧白玉か…あれは真珠かしら、何かしら、とあの人が聞いたとき、あれは露だよ、と答えて、その露のように私も消えてしまったらよかったのに。

⑨これは、二条后が、従姉妹の女御のおそばに、（女房のようにして）お仕え申し上げるようにしていらっしゃっていたが、顔立ちがとても美しくていらっしゃったので、（男が）盗み出して背負って連れ出したところ、兄上の堀河の大臣、ご長男の国経の大納言が、まだ身分も低い者で宮中へ参上なさると、ひどく泣く人のいるのを聞きつけて、引きとどめて取り返しなさっ

給ふ　に、　いみじう　泣く　人　ある　を　聞きつけ　て、　とどめ　て　取り返し　給う　て　けり。⑩それ　を、　かく　鬼　と　は　いふ　なり　けり。まだ　いと　若う　て、　后　の　ただに　おはし　ける　とき　と　や。

八四・体（尊）語り手→基経・国経　接助・単接　形シク・用（ウ音）　カ四・体　ラ変・体　格助・対象　カ下二・用　接助・単接　マ下二・用　接助・単接　サ四・用　八四・用（ウ音）（尊）語り手→基経・国経　完・用　過・終　代　格助・対象　副　格助・引用　係助・強意　八四・体　断・用　過・終　副　副　形ク・用（ウ音）　接助・単接　格助・主格　形動ナリ・用　サ変・用（尊）語り手→二条后　過・体　格助・引用　係助・疑問

たのだった。⑩それを、このように鬼（の仕業だ）と言うのであった。まだとてもお若くて、后が（入内以前の）普通の身分でおいでだったときのことか。

学習活動のポイント

学習活動のポイント

❶「伊勢物語」について調べてきたことを発表する。知技(1)ア・(2)イ

❷主人公のモデルとされる在原業平について調べてきたことを発表する。知技(2)イ

■導入

❶予習の段階で調べる活動を取り入れることも必要である。図書館などの活用のし方を併せて指導できるとよい。歌物語というジャンルに属すること、在原業平がモデルらしいことなど、基本的なことが出てくればよい。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

❷業平については、系図を探してくることを指示する。また、百人一首の作者の一人である、程度でよい。

【評価】古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

■展開

学習活動のポイント

❶「芥川」を音読する。思判表B(1)ア
❷重要古語の意味・用法を確認する。知技(1)ウ・(2)ウエ
→「言葉と表現」1・2
❸現代語訳し、段落ごとに内容を確認する。知技(1)エ 思判表B(1)ア
❹男と女の境遇と事件の展開とについて考える。思判表B(1)イ
→「学習のポイント」1
❺明かされた事件の真相について考える。思判表B(1)イ

❶音読は授業に入る前の体慣らしである。その授業の範囲・内容の予告であり、授業の態勢を早く作るために効果的である。毎時間音読から授業に入る。

【評価】 文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❷重要古語は古語辞典をしっかり引いてこさせる。ここで、もう一度辞書の引き方を確認しておく。

【評価】 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

・時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❸現代語訳は、一語一語を丁寧に押さえ、そのうえで全体の筋や内容が把握できるように工夫させる。

【評価】 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、現代語訳により、確認する。

・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、現代語訳により、確認する。

❹物語としての展開を読み取って行く。登場人物の人物像などは、自由に話し合わせたい。

【評価】 登場人物の行動や心情、また、古代における男と女の行動や考え方について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、感想をノートにまとめさせる、鑑賞文を書かせる、発表させるなどにより、確認する。

❺前段までの物語との整合性を確かめる。この部分の有無によって、物語の印象がどのように異なってくるか、生徒なりの評価も述べさせてみたい。

【評価】 物語の顚末について、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、意見発表により、確認する。

■まとめと発展

学習活動のポイント

❶「白玉か」の歌に込められた男の心情について考える。思判 表B(1)エ
→「学習のポイント」2

❷第三段落があることの効果を話し合う。主態
→「言語活動」1

❶鬼に女を奪われた男の後悔と嘆きの歌であるが、男の心情の頂点でほとばしり出た感情が歌になっていることに注意させる。歌物語はこのように、物語の軸に歌が据えられており、いわば歌が中心の筋立てになっていることを読み取らせる。話し合いをさせる場合は、少人数のほうが効果的である。

【評価】歌に詠まれた男の心情について、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、歌の暗唱や訳の発表などにより、確認する。

❷第三段落があるのとないのとでは物語の印象がどのように変わるかを考え、整理させる。

【評価】進んで昔の人の恋のあり方について理解し、歌物語に親しみ、副詞の呼応などについて理解し、学習課題に沿って、第三段落があることの構成上の効果について考えようとしているか、話し合いにより、分析する。

指導上の注意点と発問例

●五八ページ

問　**「女の」（2行目）の「の」を文法的に説明せよ。**

答　格助詞で同格を表す。

補　「…デ」と訳す。「の」の前と後で表現されているものが同じであることを表しており、ここは、「女」と「手に入れられそうもなかった人」とが同じ。

問　**「え得まじかりけるを」（2行目）の「え」を文法的に説明せよ。**

答　下に打消の語（この場合は「まじ」）を伴って、不可能の意味を表す副詞。

問　**「よばひわたりける」（3行目）の「わたる」を文法的に説明せよ。**

答　動詞の連用形に付いて、「（時間的に）…し続ける」、「（空間的に）一面に…する」の意を表す補助動詞。この場合は前者で、「求婚し続けた」。

問　**「盗み出でて」（3行目）とあるが、なぜそのようにしなければならなかったのか、説明せよ。**

答　女がかなり身分の高い姫君であったため、連れ去らない限り、身分に阻まれ、想いを遂げることは不可能と思われたから。

問　(1)**「率て」（5行目）**、(2)**「ゐたり」（11行**

語句の研究

●五八ページ

2昔、男ありけり　「昔」は、説話や物語文学の冒頭の常套用語。語っている現在に対してある過去の時期の意で、遠い昔の意ではない。「伊勢物語」の各段は、大部分が「昔、男ありけり。」という文で始まっている。「伊勢物語」は、この「男」を在原業平として、その歌語りを業平の一代記となるように配列した歌物語だが、題材となった歌語りの全てが業平に関わるものではない。業平は阿保親王（平城天皇の皇子）の第五子、母は伊登内親王（桓武天皇の皇女）であるから、父系・母系共に皇孫に当たる（「本朝皇胤紹運録」）。天長二（八二五）年に生まれ、翌三年在原姓を賜って臣籍に下った。仁明・文徳・清和の三帝に仕えたが、藤原氏の全盛時に当たり、その圧迫を受けた。藤原長良の娘高子（二条后）に恋したが、清和帝の后となったため、失恋して東国に流浪したと伝えられる。紀有常の娘を妻とし、有常の妹静子を母とする惟喬親王と親交し、藤原氏の圧迫による不運を慰め合った。そのことはこの物語の随所に見られる。「けり」は過去回想の助動詞で伝承回想の意。

2女のえ得まじかりけるを　「女で手に入れられそうもなかった人を」。女はかなり高貴な身分の女性。「の」は同格の格助詞。「え」は後に打消表現を伴って不可能の意を表す副詞。打消推量を表す助動詞「まじ」の連用形「まじかり」と呼応している。

3よばひわたりけるを　「求婚し続けたが」。「よばふ」は、動詞「呼ぶ」に上代の継続の助動詞「ふ」の付いたもの。「言い寄る、求婚する」。「わたる」は「ずっと…し続ける」の意を添える補助動詞。「え得まじかりける」と分かっていても、求婚し続けたところに男の思いの深さが表れている。

3からうじて　やっとのことで。ようやく。副詞「からくして」のウ音便。

4芥川　所在不明。架空の川と考えられる。現在の大阪府高槻市を流れる川という説もあるが、そうであるとすれば摂津国の歌枕。

5胡籙　矢を差して背中に負う武具。平安時代には朝廷で儀仗用などに用いられていた。平安時代末頃から衛府の随身や武士の使用していたものを指して「えびら」と呼ぶようになったものと思われる。（「日本国語大

目）のそれぞれの意味を答えよ。

問 答 (1)連れて行く　(2)座っている

問 「草の上に…問ひける。」（5行目）とあるが、女がそのように尋ねたのは、なぜか。

答 露を見たことがないほどの深窓の姫君だったから。

問 「となむ、男に」（6行目）の「なむ」と「明けなむ」（五八・11行目）の「なむ」との違いを説明せよ。

答 前者の「なむ」は強意の係助詞。後者は他に対する願望の終助詞。

補 後者は「な＋む」で二語ということも考えられるが、意味上終助詞と考える。「語句の研究」参照。

問 ◉「神」（8行目）とは、ここでは、何のことか。

補 答 雷のこと。

神は、「神鳴」すなわち「雷」のことで、人力の及ばない恐るべきものとされていたことがうかがえる。

問 「神さへ」（8行目）の「さへ」は、どのようなことの上に付け加えているか。

補 答 夜が更けてしまったこと。

ここでは雨が降ってきたそのうえに、という意味ではないことに注意する。前に延べたことに付け加えていると考えるのが自然である。男が足止めせざるを得ない状況に

辞典第二版」）

3盗み出で　「出づ」は「中から外に出す」の意を添える補助動詞。

6かれは何ぞ　女は「露」も見たことがないほどの深窓に育った人なのである。ここで、女が男に気を許していることが分かる。男は同意のうえで女を連れ出したのである。

7鬼　本来目に見えないものであるが、後には人に害を与える異形の恐ろしい怪物として想像された。一口で人を飲むとされ、この話によって、甚だしい危難に遭うことを「鬼一口」というようになったと言われる。

8神さへ　「さへ」は添加の副助詞。「夜が更けただけではなく、そのうえ雷まで」の意。たたみかけるような文のつながりが緊迫感を高めている。

11夜も明けなむ　カ行下二段動詞「明け」が未然形とも連用形とも取れるので、「なむ」が①他に対する願望の終助詞（未然形接続）なのか、②完了（強意）の助動詞「ぬ」の未然形と推量の助動詞「む」の結合体（連用形接続）なのか、形の上からは識別できない。ここは内容から判断し①と見て「夜が明けてほしい」と解すべきであろう。係助詞「も」には「雨も上がってほしい」という意も言外に込められていると考えられる。男の意識は全て外に向いている。

●五九ページ

1あなや　感動詞「あな」＋間投助詞「や」から成る感動詞。

3明けゆく　「ゆく」は「次第に…する」の意を添える補助動詞。

4率て来し　ここまで「けり」を使って述べられてきたが、ここで「率て来し」と直接体験の過去を表す助動詞「き」を使用していることに注意する。ここは男の気持ちになって述べられており、「確かに連れて来たのに」という驚きを表していると考えられる。これが次の「足ずりをして泣けども、かひなし。」という身もだえするような後悔につながり、最後の絶唱のような歌で悲しみの最高潮に至るのである。

4足ずりをして　「足ずり」は、足を地面にすりつけて、激しい悔しさ、悲しさ、もどかしさなどを表す身体的表現。

6白玉か…　「白玉か何ぞ」は草の上に置いていた露を「かれは何ぞ。」と男に聞いた、そのことを指す。露は、はかなく美しいものの象徴で、女を表す一方、女と共に逃げ

追い込まれていっていることを表している。

問 **男が戸口にいたのはなぜか。**

答 女を追手から守ろうとしたため。

補 高貴な女性を盗み出してきたのだから、当然追っ手が考えられる。外からの敵を防ごうとしただけで、中に気が回らなかったことが男の後悔を増幅することになる。

問 **[易]「明け」という形で考えられる活用形を全て答え、それぞれの活用形の場合、「なむ」はどのように解釈できるか、文法的に説明せよ。** [1]

[中]文脈に注意して、現代語訳せよ。 [2]

[中]なぜそのように思ったのか。 [3]

答 [1]・未然形の場合…他に対する願望を表す終助詞・連用形の場合…完了（強意）の助動詞＋推量の助動詞　[2]早く夜が明けてほしい　[3]雷や雨がひどく、恐ろしかったし、一刻も早く逃げたかったから。

●五九ページ

問 **「足ずりをして」（4行目）とは、どのようにしたのか。**

答 地に足をこすった。じだんだを踏んだ。

問 **「足ずりをして」（4行目）には、男のどのような心情が表れているか。**

答 何年も思い続けたうえで、やっと連れ出した、男にとってはかけがえのない女性を、うかつにも失ってしまった嘆きと悲しみ。

補 「語句の研究」参照。

問 **「白玉か」の歌（6行目）について、[易](1)「白玉か何ぞ」は、本文中のどの部分と対応しているか。**

[易](2)「人」とは誰か、本文中の語句で答えよ。

[中](3)「白玉か」（6行目）の歌には、男のどのような心情が込められているか。

答 (1)「かれは何ぞ。」　(2)女　(3)大切な女を失ってしまった悲しみと、深い絶望感。

問 **「つかうまつる」（9行目）とあるが、誰が誰に「つかうまつる」のか。**

答 女（後の二条后＝高子）が、いとこの女御（文徳天皇女御の明子）に。

補 「つかうまつる」は「仕ふ」の謙譲語で、お仕え申し上げる、お仕えする、の意味。地の文であるから、語り手からいとこの女御に対する敬意を表す。

問 **「鬼とはいふなり」（12行目）とあるが、鬼の正体は何であったのか。**

答 女（後の二条后＝高子）の兄の、堀河の大臣（基経）や太郎国経の大納言（国経）ら。

た短い夢のような時間も表している。「白玉」は真珠。「消えなましものを」は、「消えてしまえばよかったのに」の意。「なまし」は、強意（確述）の助動詞「ぬ」の未然形に、実現不可能な願望を表す助動詞「まし」が付いたもの。ここは連体形。あの瞬間に消えてしまっていたら、こんなに悲しい目には遭わなかったのに、という男の嘆きの絶唱。

7消えなましものを　消えてしまえばよかったのに。「消ゆ」は「露」の縁語。「ものを」は逆接の意を含む詠嘆の終助詞。接続助詞とする解釈もある。

8二条后　藤原長良の娘、高子。清和天皇の女御。陽成天皇の母。三段から登場し、そこでも帝に仕える以前に男に懸想されたと語られている。

むかし、男ありけり。懸想じける女のもとに、ひじき藻といふものをやるとて、

思ひあらばむぐらの宿に寝もしなむひじきものには袖をしつつも

二条の后の、まだ帝にも仕うまつりたまはで、ただ人にておはしましける時のこととなり。

8いとこの女御　藤原良房（長良の弟）の娘、

明子。文徳天皇の女御。染殿の后とも。藤原冬嗣の娘の順子が入内して文徳天皇を産んだのに続き、明子が清和天皇を産むに及び藤原氏の外戚としての地位は不動のものとなる。（「日本国語大辞典第二版」）

10御兄人　兄上たち。

13堀河の大臣　藤原基経。長良の三男で良房の養子となる。後の摂政関白太政大臣。京を流れる堀川の東に邸宅があったため「堀河の大臣」と呼ばれた。

11太郎国経の大納言　藤原国経。長良の長男。

15ただにおはしけるとき　（入内する前の）普通の身分でいらっしゃったとき。三段末尾に見える「ただ人にておはしましける時に」に相当する語り方である。（鈴木日出男「伊勢物語評解」）

鑑賞

「更級日記」の竹芝伝説や、「大和物語」第一五五段などと同様、この段も身分の高い姫君を盗んで逃げていく物語である。ここで男が恋い慕う相手は、高貴な家柄に生まれた、これまで草の上に置いた露さえも目にしたことのないような深窓の姫君だった。男は姫君を連れ去ることで、身分に阻まれ、かなわなかった長年の想いを遂げようとしたが、途中雷雨をしのぐために立ち寄った蔵で、そこに棲みついていた鬼に姫君を食べられてしまう。こうした不条理とも言える展開が、姫君の不在を知った男の姿をいっそう悲痛なものに見せている。ところで、「白玉か」の歌がもともと業平の歌であったとする確証はない。「新古今和歌集」では、哀傷部に業平の歌として載っているが、それは「伊勢物語」を資料としているのだろう。本来、別人による恋の歌の可能性もあり、「白玉か何ぞ」というのは、露ではなく涙を歌ったものかもしれない。たまたまこうした略奪婚的な話と結び付いて伝えられているから、我々はそれにのっとった解釈をするわけだが、「伊勢物語」の理解としては、もちろんそれでよいのであろう。姫君を失い、一人残されたことに気づいたとき、今度は「消えなましものを」と自らの死を望む、そうした男の深い悲しみと、いまだ尽きぬ恋心とを、この歌から読み取るべきである。

この話には、後日談がある。女は二条后藤原高子で、その兄弟が取り戻したのを鬼と言ったのだ、とある。一種の付会の説で後人のものと思われる。現実の二条后と業平との間に、物語に語られるような恋愛関係があったかどうかさえ、かなり疑わしいのである。しかし、現存する「伊勢物語」は本話のように、業平らしき男と二条后との間の交渉とその後日談を語る話が、三・四・五・二十六・二十九・六十五・七十六・百・百六段にまで及んでおり、物語の軸の一つであるかのようになっている。仮に「古今和歌集」の時代から二人の恋があたかも真実であるかのように伝えられていたにしても、本話に後段部分が加わっていることをまるで興醒めだとみるか、悲劇に真実味を与えているとみるかは意見の分かれるところであろう。「白玉か」の歌の解釈も含め、多面的な鑑賞の可能性を有する奥深さも本話の魅力なのである。